

## シリーズ 私の一冊の本

看護学部 谷口通英 先生

M. H. クラウス、J. H. ケネル、P. H. クラウス 著 竹内 徹 訳

### 『親と子のきずなはどうつくられるか』

谷田図書館 493.91/K1 2 医学書院 出版

本書は、Marshall H. Klaus, John H. Kennell, Phyllis H. Klaus による『Bonding Building the foundations of secure of attachment and independence』（『絆の形成—確かな愛着と自立の基礎を築く』）の全訳です。その前身である『Maternal-infant Bonding』（『母と子の絆』 医学書院 1979）及び『Parent-Infant Bonding』

（『親と子のきずな』 医学書院 1985）につづく第3版で、著者らが長年携わってきた研究・観察してきた結果をまとめたものです。妊娠・分娩・産褥という周産期において、子どもと親が互いの存在を認識し、いかに絆を形成し親密な関係を維持するか、だけでなく、父親と母親それぞれにどのような身体的・情緒的支援が必要かを明らかにしています。生まれたばかりの子ども（新生児）はひとりでは生きていくことはできません。新生児は自分を育ててくれる人が必要であり、全面的に依存しています。単に日常生活の世話をするだけでなく、新生児に関心を寄せ、心から慈しんで無償の愛情を注ぎ、情緒的発達を促してくれる母親や父親を必要としているのです。しかし子どもを授かり出産しただけでは、有能で無償の愛を注ぐ親になれる訳ではありません。新生児が健康な状態で誕生した場合、誕生した数時間、数日間に安心して親密に関われる時間をもち、触れ合うことで互いに反応し合えることを発見し、母乳哺育をすることで愛情ホルモンと呼ばれるオキシトシンの分泌が促進され、かけがえのないわが子であるとの認識が深まります。そのような関わりを支援することが重要なのです。

章立ては9章まであり、とりわけ1章：妊娠—新しい関係の始まり、4章：家族の誕生 出生後の数分間～数時間、6章：絆の形成—生後数日間、数週間、7章：早産児の誕生の親子結合、8章：奇形をもつ子どもと親子結合、にはこの時期どのように取り組むべきか、勧告として述べられています。医療従事者となる学生だけでなく、いつか子どもを授かり親となる若者として、是非一読されて、子どもとの絆形成がいかに人生を豊かにしてくれるかを知り、また内包しているより良い親となる種を発芽成長させるために、どのようにすればよいかを知る機会になればと思います。